

看護学部開設を機に、全学が心機一転を

中京学院大学 学長
高嶋 芳男



たかしま・よしお氏

1963年 早稲田大学教育学部社会科学科卒業
1963年 (株)高嶋砒業社入社
1968年 (株)高嶋砒業社代表取締役
1995年 瑞浪市市長(3期歴任)
1997年 学校法人安達学園評議員
1998年 学校法人安達学園理事
2008年 学校法人安達学園中京学院大学学長
2010年 学校法人安達学園理事長

私は2007年まで岐阜県瑞浪市の市長を務めていました。市長になったのは1995年ですが、それ以前の28年間、瑞浪市では市長選が行われませんでした。そういう閉塞した状況に危機感をもった地元の同級生たちに担ぎ出されるかたちで選挙に出て、企業経営者から一転、市長となりました。

様々な施策を行い、将来への布石も打てたと自ら判断し、3期12年をもって退任しました。そして、いま一度企業経営の道に戻ろうかと考えていたところ、旧知の安達学園から学長就任のお話をいただきました。地域社会に貢献する人材を育てる大学の経営をぜひお願いしたいという強い要請でした。

東濃地区は「焼き物」という単一産業で成り立っていましたが、将来の発展を考えると単一ではなく、複合産業の街になる必要性を感じ、企業誘致を積極的に行いました。その際、企業から必ず言われたのが「あなたの地域には、総合病院や大学はあるか」ということでした。企業は単に利益を追求するだけでなく、社員の家族のことまでしっかり考えて活動しているのだと感じるとともに、地域に根差した大学や病院の必要性も強く認識いたしました。

学生は経済効果をもって地域を支え、学校は人材育成をもって地域に貢献する。だからこそ地域にとって重要な存在なのです。私も行政の仕事をするなかで、人材の大切さを痛感していました。そんな個人的な経験や想いと学園の方向が合致し、この仕事をお引き受けすることにしました。

企業も、行政も、大学でも重要なのは「人材」

私は産、官、学を順番に経験しているわけですが、苦勞もその順に大きくなっているように感じています。企業の仕事は、社長自らが企画や営業に精を出せば業績が上がる。その点、自らの裁量が生かしやすい仕事のように思います。行政の仕事は、国や県から補助金などをもらって事業を行うという方法がありま

す。一見難しそうですが、これも努力次第です。いい計画を練り、熱意をもって交渉に当たる。たとえ前例のないことでも、こちらの想いがきちんと伝われば予算が下りる可能性は低くありません。

ところが、学校にはそうした手立てがありません。GPや科学研究費はありますが、それらは教育や研究に直接使用するものであって、経営で使うものではありません。となれば、やはり学生の確保がポイントになります。しかし、それに苦勞しているのが現状です。

現在のように難しい経営環境にあっても、結局のところ地道な努力を続けていく以外にありませんが、ひとつの方向として、大学としてやることをシンプルにして、パワーを集中させる方法があると思っています。

例えばカリキュラムを思い切って、学生が最低限学ばなければいけないこと、最低限教えなければいけないことに絞り込む。語学に関していうならば、教科を英語と中国語のみにして、目標レベルもTOEIC®何点などと、あらかじめ決めておく。また、学部ごとに習得すべき知識やスキルをはっきり決めておき、全学生がそれを達成できるようサポートしていく。これらのことは、まだ私の頭の中にあるだけですが、今後学内でコンセンサスをとっていきたいと考えています。

そして、これが最も重要なことですが、今日のような厳しい就職戦線だからこそ、本学としては「就職」にこだわりたい。大学が学生の就職について責任を負うのは当然のことですから、それをきちんと明記し、全教職員あげて取り組んでいきたいのです。

こうした新たな試みが成功するかどうかは、結局のところ教職員の肩にかかっているといえます。私と同じ目標に向かって進んでくれる人が学内にどれくらいいるか。ここでもやはり「人材」が問われていると実感しています。

看護職が不足する地元からの強い要請

2011年に18年目を迎える本学は、経営学部次ぐ2

つめの学部として2010年に看護学部を開設いたしました。さらに中京短期大学を中京学院大学中京短期大学部とし、大学として歩み始めています。

看護学部開設には地域からの強い要請がありました。本学は岐阜県の東濃地区に位置していますが、このエリアでは看護職が大変不足しています。また、高齢化率が高く、私も市長として特別養護老人ホームや老人保健施設の整備を進めましたが、それだけではとても間に合いません。訪問看護ステーションをつくり、地域のお年寄りをケアする体制づくりをしなければならぬと私は以前から構想しており、市長退任後にやるべき仕事のひとつと考えていました。

そんな折、県立多治見病院の院長より、東濃地区唯一の大学である本学に対して、看護職を養成する学部開設の要望がありました。併せて東濃5市(多治見市、土岐市、瑞浪市、恵那市、中津川市)の各市長さんからも連名で要望を受けました。こうなれば何が何でも立ち上げなければなりません。地域の大学には、地域の要請にお応えしたり、地域のための人材を育成し、地域発展に貢献する使命がある。それが本学のモットーですから、協力するのは当然です。

文部科学省からは「実習先と先生の確保が大変ですよ」とアドバイスを受けました。しかし、県立多治見病院を始め、近隣のほとんどの病院が協力的でした。また、とても熱意のある、すばらしい先生方にも集まいただきました。この充実した環境で学んだ学生がいずれ地域に出て、ホスピタリティあふれる看護師、保健師として現場で活躍してくれるでしょう。それが本学の新たな歴史となり、本学の評価を改めて高めてくれるものと今から大変楽しみにしております。

同時にこれを機に、短期大学部ならびに経営学部もここからが再出発という新たな意気込みが必要だと自覚しています。大学が本当に大変なのは、真にその価値が問われるのは、これからだと思いますから。 ■